

拓水

題字は 泉通連三浦会長

2 月号
No. 113

発行所
兵庫県漁業協同組合連合会
兵庫県水産改良普及協会
神戸市兵庫区新在家町123
発行人 三浦清太
TEL 078 6301-6685
編集 拓水編集委員会
発行日 毎月 30日
一部10円
昭和32年10月18日
第3種郵便物認可

第十四回

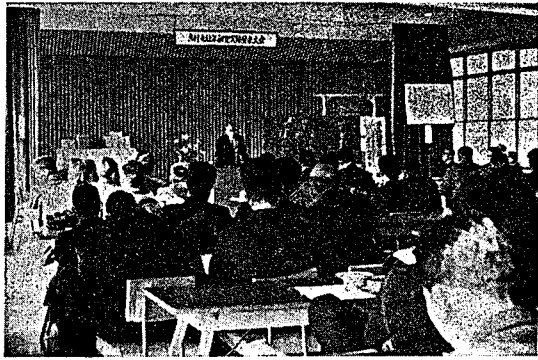
兵庫県内海地区

漁村青壮年研究実績発表大会

一月十日水産会館で第十四回兵庫県内海地区漁村青壮年研究実績発表大会が兵庫県、兵庫県漁連の共催のもとに開催された。

参加者は約百名で、発表者七名(団体)より貴重な研究実績発表があり、質問も多く、最近の大会のなかで、一番充実した大会であった。

大会は、森本県水産課長の進むべき道について有意義の挨拶の後、瀬戸内海栽培 養な講演を拝聴した。次いで次のとおり発表が行なわれたが、わざわざ馬からこの大会に参加された、但馬水産研究クラブ連合会の伊藤会長から活潑な



講演 (内橋潔先生)

小型底びき網 巻揚機の改良について

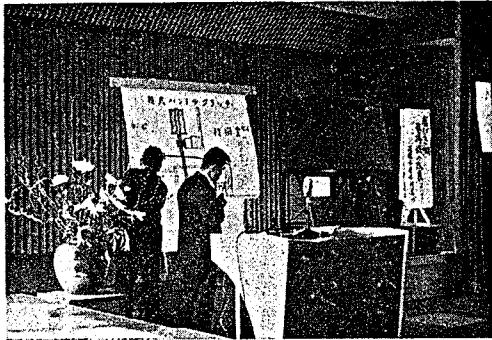
飯屋水産4Hクラブ
堀江 薫

小型底びき網漁業において、揚網中にロープに巻きこまれてケガをする場合が非常に多く、なかには不具者になったり、死亡する不幸な例も少なくない。小型底びき網漁業を主力とする飯屋地区においてもその例にもれず、昭和三十年から三十九年の十年間に、重傷者十七名、軽傷者十六名、計三十三名の事故者を出し、この間ロープのクランプが機関室の外からでははつれるように工夫をしてきたが、事故をゼロにすることはできなかった。そこでクラブでは、絶対

ガザミの蓄養殖について

福良漁協青年部
森 茂樹

ガザミは、最近価格が三年前の二倍以上となり、福良では高級魚となっているが、脱皮後の甲の軟いものが、および六月から九月にたれる小さいものは非常に安く買手もなかった。そこで青年部では、昭和三十九年から、甲を硬くする試験研究を行なった。昭和三十九年は、金網生簀を用いて蓄養したところ、甲は硬くなったが斃死率が高く失敗した。昭和四十年は、水産資源保護協会の助成を得て、県の栽培漁業中間育成場の陸上池を利用して、小割網を用いて行なった。その結果甲は金網生簀のときよりも五日早く、約一週間で硬くなった。一尾当りの日方は、一・一倍から一・七倍に増加し、価格も軟い甲のときより三倍から四倍となり、立派なガザミとして売ることができた。この試験に際して、施設設備を改良すると共に、小割網の欠点のため、約二十五パーセントのガザミを逃がしたが、この研究の成果を高めたい。



(飯屋4Hクラブ) 堀江 薫

クラブ活動の歩み

飯屋水産4Hクラブ
相田 勝美

飯屋水産4Hクラブは「なうと共に、県および全国青年の実践活動により漁村建設を努める」という趣旨のもと、昭和二十七年、クラブ員百二十名をもって発足した。その後、自主的な活動を続け、昭和三十三年水産庁より「模範漁村自治研究会」として表彰を受け、他府との技術交流も活発に行

但馬地区における 研究クラブの活動について

但馬水産研究クラブ連合会
伊藤 久一

当連合会は、九地区の水産研究クラブ(会員数二〇八名)の連絡組織として昭和二十八年五月に発足した。運営の中心である役員(各クラブ三名)を二ヶ月に一回の割合で開催し、県内の漁況は三日に一回の割合で報告されることになり、漁業者に火へん喜ばれ、漁業者で火へん喜ばれ、漁業の発展に大きく貢献している。また漁村青年は口が重いのでは、但馬地区発表大会のあつと全員討議を行なうなど、自分の意見を発表する機会をつくるよう心掛けて

釣漁具の改良について

明石浦漁協青年会
浜崎 利彦

明石浦漁協青年会では、昭和三十三年よりサワラの釣漁具の改良を重ね、三十八年の全国大会で発表された改良釣漁具は、非常に好評で、他府県へも普及して青年会ではこの釣漁具にも欠点があるので、更に次のような改良を加え、漁獲量の増加と、経費、労力の

ワカメ養殖 経営上の問題点について

東垂水地区水産研究会
和田 貴一

昭和三十六年よりワカメの経営上の問題点を経験し種々の培養と養殖の研究をした。種々の培養と養殖の研究をした。種々の培養と養殖の研究をした。

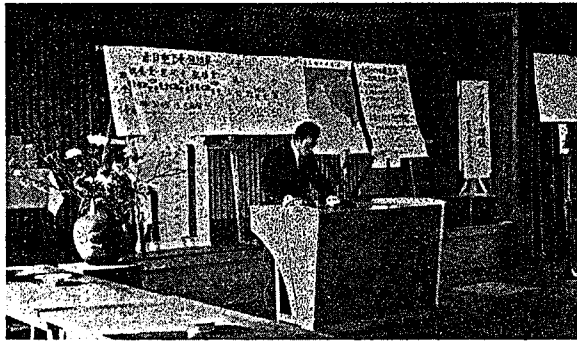
- 1 種系にムラ付きがあること。
- 2 波浪により二、三割の流失があること。
- (販売) 生ワカメの販売量に限りがあるので、早取りして生ワカメで売ると、十分成長させて干ワカメで売るとどちらが得かというこ
- (収入) ワカメ養殖に従事する日の一人一日当りの収入(純益)は七八〇円、これでは十分といえないこと。そのほか、研究会の仕事などにより、儲かる仕事になるよう努力すべきこと。

- 1 浮子の改良 (1) 浮子を細長いものに代えて抵抗を少なくし、サワラがかかっても道糸の切れぬようにした。
- 2 補助浮子を付け、サワラのかかった釣具がはつきり見分けられるようにした。
- 3 おもりの改良 海底の岩礁に釣具がひっかからないようにした。
- 4 針の改良 (1) 針の結び目の改良 麻糸の代りにステンレスを用い、釣りに作成、補修時間を大幅に短縮した。
- 2 枝糸の改良 三本の枝糸の釣具組合を檢討し、釣れる率の劣る一本を省き、釣具の扱い方を容易にし、餌料を節約した。

アカガイの養殖について

岩見小型底びき網
研究グループ
山中 鶴雄 (代理)

当地区では、近年アカガイの漁獲が増してきたが、イの漁獲が少なくなったが、サイズの小さい個体の価格が非常に低く、(五十グラム未満、一ヶ五十二銭)を留めれば、貝の成長、フジツボが大量に付着し、貝の殻が白くなって商品価値が下り、また目掃除には相当の方法によって行なう。



(アカガイ養殖発表) 山中 君

ロープの強度について

ロープの強度について

現在水産用として使用されているロープには化学繊維のものと天然繊維(主としてマニラロープ)が使用されている。また一部にはワイヤーロープが使用されている。このロープにどの位の力をかけると切断するか、あるいは実際使用するのに安心してかけられる力(使用力)はどの位か。これは勿論そのロープの太さと品質によって定まるものであるが、その太さによって次のような計算式により、大体的見当がつけられる。

(1) マニラロープの場合

破断力(ロープを切断するのに要する力) = $(\frac{\text{ロープの直径}}{8})^2 \div 3$ 使用力(安心してかけられる力) = 破断力 $\div 6$ 直径はミリメートルではかること。
単位…トン

(2) ワイヤーロープの場合

破断力 = $(\frac{\text{ロープの直径}}{8}) \times 2$
使用力 = 破断力 $\div 6$
直径はミリメートルではかること。
単位…トン
例えば直径16ミリメートル(径5分)のマニラロープの破断力及び使用力は次のようになる。
破断力… $(\frac{16}{8})^2 \div 3 = 2 \times 2 \div 3 = \frac{4}{3}$ トン
使用力… $\frac{4}{3} \div 6 = \frac{2}{9} \times \frac{1}{3} = \frac{2}{27}$ トン
ワイヤーロープも同様に計算できる。
化学繊維は種類も非常に多く、繊維の性質により強度も大分異なるが同じ太さのマニラロープを目やすとして、それぞれの品質を考慮して使用すればよい。

今年のイカナゴ漁況(第二報)

企業化は難しいということとなった。
2 延縄式養殖(昭三九・七) 三九・九 貝を1のポケットカゴに入れるが、フジツボの付着をさけるため、海底に底延縄式に設置した。これは順調な成績をあげてきたが、強い赤潮のため貝が全滅し、グラブで貝に大きなショックを与えた。しかしこれは赤潮が原因なので、四十二年にもう一度試験することにしてい

(1) 産卵期

イカナゴの産卵期は、例年十二月下旬～一月上旬の間であるが、その産卵(約十日間)は各年異なり、遅い年には一月上旬に始まり、早い年には十二月下旬に始まり、逆の相関が認められる。例えば一九六四年(昭三十九年)の場合、推定産卵量が一・四三トンであるが、漁獲量は七・四億尾しかとれず、一九六五年(昭四十年)にはわすか〇・三七億尾の当りながら、三六三・三億尾の当り漁獲された。このことは、実際には産卵量に比して当り魚が孵化(種のプロラクトン)による食害あるいは稚仔相互の餌料圧迫を生じて、この時期に莫大な稚仔が死滅するものと推定される。

(2) 産卵量との関係

当り魚量との関係
産卵量と当り魚量との関係は、産卵量に比例して当り魚量も増加する傾向がある。これは、産卵量が増えるにつれて、孵化した稚仔の数が多くなり、その結果として当り魚量も増加するからである。ただし、これはあくまで一般的な傾向であり、実際の漁況には様々な要因が影響を及ぼしている。

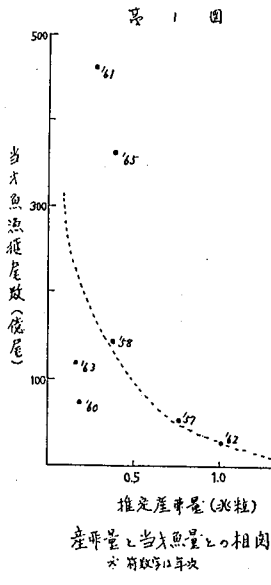
(3) 親魚(フルセ)の漁況

親魚(フルセ)の漁況
親魚の漁況は、産卵期前後に最も盛況となる。これは、親魚が産卵を終え、エネルギーを消費しているためである。また、産卵期には親魚の成長も遅くなる傾向がある。

一二月(四〇・一〇)アカガイはあまり移動しないので、岩見地先の一定区域に、小さいアカガイを放流し、この区域におけるアカガイの漁獲を禁止した。その期間(六ヶ月一年)に放流したアカガイは、重量で約五倍、金額で八十倍となり、約百万円の増収という好成績をあげることができた。今後は、アカガイ種苗の確保をはかるため、天然採苗や人工化の研究を行なうべきである。

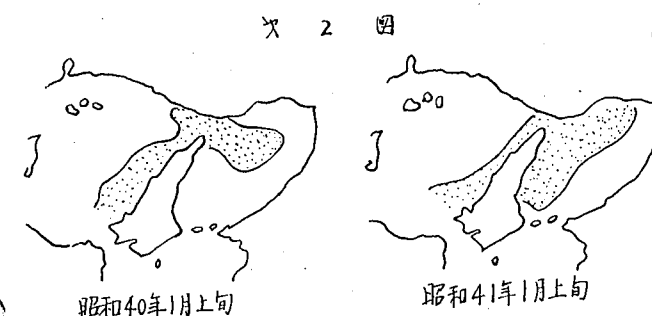
(4) 当り魚(シンゴ)の状況

一月月上旬に実施した稚仔採集調査の結果では、当り魚の大きさは三・三mm～七・五mmのものが採集された。このうち、四・〇～五・〇mmのものが九五%を占めている。稚仔の採集量は産卵期から推定して例年と大差はないが、その分布域は大分湾で、昨年より広い範囲である。



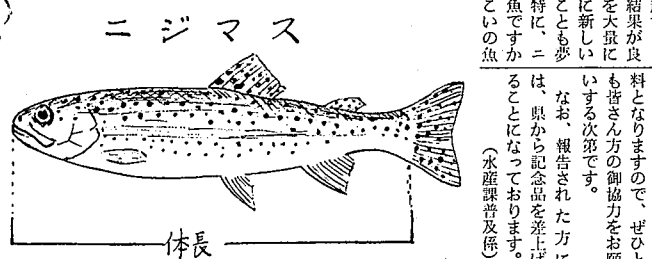
海へニジマスを放流—期待される新魚種の誕生

この報告は、今後ニジマスを大量に放流するかどうかの決め手になる貴重な資料となりますので、ぜひとも皆さんの御協力をお願いいたします。
なお、報告された方には、県から記念品を差し上げることになっております。



イカナゴ稚仔の分布域

海へニジマスを放流—期待される新魚種の誕生
県では、瀬戸内海栽培漁業協会の協力して、二月下旬福良湾および岩屋沖に各二十尾のニジマスを放流しました。ニジマスは淡水産で各地で養殖されていますが、その稚魚は海産の魚と比べて、冬場にもついでに魚と馴らしてゆくこと二週間程度と同じように海産の魚になつてしまふ。今度放流するニジマスも、そうして馴らしたもので、昨年香川県で試験放流したところ、
1 淡水で養殖したものに劣らないニジマスが漁獲された。
2 ニジマスは、水温二十度以上では成育しないといわれているのに、秋になって一キロ以上もあるニジマスが漁獲された。報告されています。
本県の場合、春にはイカ、ナゴ、イワシなどの餌に恵まれ、また明石、鳴門海峡



今年の場合、親魚の年令組成や海況条件から推して、漁獲量が増えることが期待される。しかし前述のように、大規模の親魚はごく少ない模様。
稚仔の拡散状況は未だ初期の状態であるため、二月の水試(浜田)

